

成二期における松前藩の自己認識

「松前は日本ではない」発言をめぐって

秦 野 裕 介

はじめに

アイヌ問題の概説書においてしばしば見られる言説に「アイヌ勘定」なるものがある。「アイヌ民族の淳朴な性質を利用した」アイヌ勘定とは、「和人がアイヌと物々交換する時に数をこまかした方法をいい」、『はじまり』^①といつて一匹とり、それから十まで数えて最後に『おわり』^②といいながら一二匹を取るといつぶうに、数量觀念の乏しかったアイヌを騙す^③というものである。これの変形版が「アイヌ民族が文字を学ぶのを嫌つてそうさせまいとした」「自分たちとしかコミュニケーションできないようにしておいて、交易などの利益を独占しようとした」と対等になるをおそれた、というものである。しかしこれも妙な話で、佐々木史郎氏が指摘するように、「日常言語が書記化されていないことと識字とは別問題」^④なはずである。

「狡知に長けた」松前藩が「純朴な」アイヌを収奪している、という非難は、アイヌ問題の著述家が初めて言い出したことではない。松前奉行羽太正養（一七五二—一八一四）の『休明光記』（一八〇七年）にすでに松前藩を非難する文言が現われる。そして羽太はロシアの南下の危機を指摘し、対策としてアイヌに「五常の道をも教へ、いろは

文字をもちならせ」ることを主張しているのである。

松前藩によるアイヌの収奪という表象に関して、岩崎奈緒子氏は「近世後期に、ロシアの南下という国際状況の変容に対応して、アイヌ社会の外部で創出され、第一次幕領化を正当化する論理として機能し、幕末において再び確認された政治的言説であつた。そしてその言説は『開拓史観』『北門鎖鑰史観』によって、『歴史的事実』に置き換えられたのである」と指摘した。羽太の『休明光記』の記述はまさに第一次幕領化を正当化する論理として創出された論理である。「アイヌ勘定」なる言説は、いわば羽太正養の言説の焼き直しにすぎないのである。さらに「淳朴なアイヌ」像の源流を訪ねると、『新羅之記録』に行き着く。コシヤマイン戦争に始まる蠣崎氏による「だまし討ち」の事例は専ら松前藩家老松前景広（一六〇〇～一六五八）撰述の『新羅之記録』（一六四六年）を出典としている。この『新羅之記録』は和人によるアイヌへの非道な扱いについて述べているのではない。逆である。英邁な松前藩主の祖がいかにか「無知なる」アイヌをつまぐ駆逐し、松前藩を作り上げたか、ということを主張しているのである。この史料で単純に歴史を構成すれば、当然「アイヌ勘定」的な見方を中心とした歴史になるだろう。⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵

つきたいとかがえているもののひとつだといつていい」と評価する。しかしそもそもアイヌがなぜ「動物にちかいたようなひどい生活」を強いられているのか、という視点がバードには欠けている。旅行者であるバードがそのような視点を欠いているのはやむを得ないだろうが、「ほとんどアフリカの未明の段階を出ようとせずに生活しているアイヌ人」という吉本氏の定義には疑問を感じざるを得ない。本当にアイヌは吉本氏の指定する「アフリカの」な段階なのだろうか。そうではあるまい。バードが見ているアイヌは「蝦夷地勤番制下」における「場所請負制」のもとで疲弊した姿である、と考えるべきであり、それをユートピア化するべきではないだろう。

以上見てきたようなアイヌに対する「未開視」は、松前藩の自己主張である『新羅之記録』や、蝦夷地幕領化という使命を帯びた幕府官僚の記録に依拠するかぎり、つきまとう。そこで注目したいのが西洋人による記録である。これはこれで多くの偏見に満ちており、字面通り受け取るわけにはいかないが、少なくとも和人の偏見とは少しく意味合いが異なっており、両者を連携させることで、少しでも当時の「蝦夷地」の実情には迫れるであろう。西洋人の記録におけるアイヌは基本的に交易民であり、今日の研究では西洋人の記録を含めた多様な史料を駆使して交易民としてのあり方を論証する成果が提出されている。本稿では先行研究に学びながら、西洋人の見た松前氏の姿を検討し、松前藩の自己主張がまつた家伝である『新羅之記録』の相対化を目指したい。

一 「マシマイは日本ではない」

松前公広（一五九八―一六四一）は松前藩二代目藩主、松前慶広の孫で、父盛広（慶広嫡男）の早世のため祖父慶広の後を継いで一六二四年襲封した。彼の名前を一躍有名にしているのはイエズス会宣教師ジェロニモ・デ・アンジエリス（一五六八―一六二三）が記録した「松前は日本ではない」という言葉である。一六一八年、松前に上陸したアンジエリスが松前に来たことを知った公広は、それを知らせに来た「乙名」に対し、「バードレの松前へ見えるこ

とはダイジモナイ、何故なら天下がパードレを日本から追放したけれども、松前は日本ではない」と発言した。¹⁷⁾

公広のこの発言は「日本」という概念を相対化するものとしてしばしば取り上げられる。一方ここでの「日本」の用例が単に徳川將軍権力のことを指しているに過ぎず、外様大名に多かれ少なかれ共通した意識である、ととらえる見方もある。ただここで気になるのが「松前」という言葉である。ここでは「マツマエ」ではなく、「マツマイ」というふりがなが打たれている。ポルトガル語のつづりでは「Maqumai」となっているので、間違いないく「マツマイ」なのである。この傾向はオランダ東インド会社の記録でも変わらない。基本的に「マツマイ」もしくは「マツメイ」となっており、管見の限りでは「マツマエ」となっている例は少ない。²⁰⁾「マツマイ」を日本語化するときに「松前」という漢字を当てるので、いかにも「日本的」な感じがする。現に松前広長（一七三七—一八〇一）の『松前志』（一七八一年）には「松前の名は今の法華寺のあるところの西南の出崎に大松ありしが、其茂枝西南の麓に枝垂れたるを以て、町を大松前と号し」とある。しかしこれが疑わしいのは『諏訪大明神縁起絵詞』を見れば明らかである。そこには「宇曾利鶴子別」（宇須岸＝函館とみるのが有力）とならんで「萬堂宇満伊大」という地名が存在する。「マトウマイ」と読むようであるが、これが「松前」の古い読み方であるのは異論がないであろう。「マトウマイ」が「マツマイ」と表記されているのである。「マトウマイ」という地名についても、アイヌ語地名であることは間違いない。²¹⁾とすれば、「マツマイ」という名前もアイヌ語由来であろうし、そう考えると松前氏の位置づけもまた変わってくるであろう。

そこで先ほどの史料における「松前」という表記を「マツマイ」変えてみるとどのようなことになるであろうか。

「パードレのマツマイに見えることはダイジモナイ、なぜなら天下がパードレを日本から追放したけれども、マツマイは日本ではな」²²⁾

「マツマイは日本ではない」と書かれると、いかにも当然という感じがしてくる。これを「松前」と漢字で書いた

のと比べると、余計にその感が強い。「松前」と漢字で書かれると、いかにも「日本」の土地という感じがして、そこに「日本ではない」という言葉が入ることでもいかにも特殊なイメージになるのである。しかし実際には「マツマイ」という、アイヌ語地名であるわけであるから、「日本ではない」というのは当然なのである。

二 マツマイドノの姿

マツマイドノに関する記述はアンジェリス第一報告書における「マツマイは日本ではない」というのが初出であるが、その後、宣教師達は「マツマイドノ」に関する記述を他にも多く残している。

まずカルワリーユ報告書を見ていこう。ディオゴ・カルワリーユ（一五七六—一六二四）は一六二〇年と一六二二年の二度にわたって蝦夷地入りをしており、その内一回目の記録が現存する。そこにはマツマイドノの位置づけが述べられている。

「マツマイの殿は日本人ですけれども、彼ら（イエズス）の王であるとも言えるでしょう。なぜなら、前に申しましたごとくに、この地（マツマイ）に来る人はだれもこれ（マツマイドノ）に礼を尽くし、またその標章と許可状とを携行するものがイエズス中を安全に歩けるからです」²⁷

ここでは「マツマイの殿」は「日本人」であるが、「イエズス」の「王」でもあるという「マージナル」な性格を持つものとして描かれている。しかし「マツマイの殿」は「日本人」なのであろうか。あるいは「日本人」である、というのはどういう意味で「日本人」なのだろうか。

そもそもアンジェリスやカルワリーユが「Japão」というのは「日本」の義であって「日本人」ではない。アンジェリスやカルワリーユはたとえば「Yezo」という地名や「Yezojin」あるいは「Yezos」というような人間集団名はわけて記述している。「日本」という地名の場合は「Japão」と表記し、「日本人」という人間集団を表記したい場合に

は「Japões」となっている。したがって「posio que Japão」という言葉を翻訳する場合、「日本人である」と訳されるべきではなく、「日本に位置する」と直訳されるので、せいぜい「日本の支配下にある」と訳されるべきであろう。従って先の言葉も「マツマイのトノは日本の支配に服していますが、同時に彼ら（イエゾ人）の王であるともいえるでしょう」と訳するべきであろう。

「日本の支配に服する」というマツマイドノと日本の関係を示すであろう記述はオランダ東インド会社のメルテン・ゲリッツセン・フリースの指揮するカストリカム号の蝦夷地探査の記録にある。その中でマツマイシマドノに関する記述が、カストリカム号の乗組員がアムステルダムで刊行した『要約記録』に記載されている。そこには「イエゾの首都マツメイ」の記述として「マツメイにはエゾ島の支配者が居を構えており、日本人は彼をマツマイシマドノと呼んでいる。マツマイシマドノ―同島の総督、あるいは領主―は江戸にいる日本の皇帝陛下に敬意を表し、毎年多くの銀、矢羽根に用いる鳥の羽根、及び貴重な毛皮を携行して贈り物とする」とある。つまりマツマイシマドノは「日本の皇帝陛下に敬意を表している」点に「日本人」たる所以があると読める。

直接マツマイ氏について述べたものではないが、フリース隊が出会ったマツマイ出身（史料ではマチマイとなっている）の商人オリに関する記述も興味深い。

「オランダ人が日本に交易にやってくるように、自分はここに交易のために来たのである」と語った。そしてエゾ地のエロエン（襟裳岬）の西方に位置するマチマイから来たのであると。マチマイには日本人の支配者がいて、その場所には日本人によって統治されているのである。「彼（オリ）はまた、自分は日本人の父から生まれているが、自分の母はエゾ出身であり、日本語と同じくエゾ語をも話している」と語った」というオリは父は和人、母はアイヌという「マジナルマン」であり、「日本」と「エゾ」の双方に属する両属的な存在だったのである。この記事に関連して『福山秘府』「他国漂人部卷之三十二」には「寛永二十癸未年」（一六四三年）の記事として「七月十二日阿蘭陀船漂

著于東蝦夷地アツケシ、船長三十尋、幅四間程、船中石火矢拾五六挺仕掛之。上乘小山丑兵衛、船頭弥兵衛見届、注進于松前²⁹」という記事があり、「松前年々記」にも寛永廿癸未のこととして「東蝦夷地アツケシ工阿蘭陀船漂着」の記事があり、「七月十二日アツケシ船上乗小山五兵衛・船頭弥兵衛右之黒船二乗移見届松前工註進之為クスリ工戻り、日和ヲ待候内右之黒船アツケシヲ出船³⁰」とある。これらの「黒船」がカストリカム号であることはいうまでもなく、オリとは小山五兵衛か弥兵衛のどちらかであろう³¹。

三 マツマイドノは「日本人」か

古川古松軒（一七二六―一八〇七）は『蝦夷松前諸説』（一七八八年）において「松前の人の先祖は蝦夷人にして日本人の子孫をは歴家なりとし、蝦夷の子孫ということは各かくす風あり³²」と述べている。一見極端な珍論に見えるこの見方も、「マツマイは日本ではない³³」という松前公広の言葉を前にしてみた時、その認識は実は案外正確なのではないか、と思える。松前藩の蝦夷視はもともと藩主公認のものであったのである。そもそも蠣崎氏が松前に本拠を構えるときにもアイヌの援助・支持なくしては不可能であった。それが俗に天文の講和といわれる、ハシタイン・チコモタインとの講和におけるアイヌ側に有力な条件での取り決めに現れている。松前氏はその成立から「蝦夷³⁴」と不可分の関係にあったのである。

しかし松前氏が近世大名としての地位を確立しようとするとき、そのような自己認識はむしろマイナスに働くだろう。松前藩の課題は自己の祖先が「蝦夷人」である、という見方の出てくる余地を排除することにあった。言い換えれば「マツマイは日本ではない³⁵」という発言が出てくる背景を完全に否定し、自らの歴史を新たに紡ぎ出す必要に迫られたのである。そのような要請のもと、著述されたのが『新羅之記録』であった。『新羅之記録』の物語は以下の通りである。若狭守護武田信栄の遺児信広は父信栄の後継者となった叔父信賢に遠慮して蝦夷地に渡り、蠣崎季繁の

食客となった。その後季繁とともにコシャマイン戦争で活躍し、最後にはコシャマインを強弓で討ち取る。その後蠣崎季繁の婿養子となつて蠣崎氏を嗣ぐことになる。その後百年にわたる対アイヌ戦争に計略をもつて勝ち抜いた蠣崎氏は、後に豊臣秀吉から朱印状を交付され、下国氏の支配から脱した蠣崎氏は同時に秀吉からアイヌに対する支配権をも付与され、近世大名の仲間入りを実現した、というのが大ざっぱな筋立てである。しかしこれを文字通り受け取ることではない。まず武田信栄の子孫であるという系譜からして当時から疑念がもたれている。またアイヌに対する支配権を付与された、という記述があるが、そのところを『新羅之記録』で見みると、「諸国より往来の者某（シャモ）に対し、夷狄猛悪の儀有るに於ては、速やかに其旨趣を言上せしむ可し、関白殿数十万の人勢を差遣はし悉く夷狄を追伐せらる可き」と勇ましい。しかし実際の関白朱印状は、「对夷人、同地下人、非分之儀不可申懸候」とあるのであつて、和人に「夷狄」が猛悪の儀を働くことではなく、「夷人」に対して和人が「非分之儀」を行なうことが禁止されているのである。

この一例から見てもわかるように『新羅之記録』には松前藩にとって都合の良いような虚偽が書かれていることがわかるだろう。

蠣崎氏の常套手段とされている、アイヌに対するだまし討ちの事例についても同様だろう。景広が「だまし討ち」の話を多く載せたのは、松前藩の祖がアイヌ相手に激しい戦闘を繰り広げ、アイヌを圧倒して現在の松前藩を作り上げたことを主張したいからである。その戦果をなるべく輝かしいものにしようとするならば、圧倒的な強さのアイヌを計略をもつて克服して行く、というストーリーを作り上げることが効果的である。

二代目藩主が宣教師に語つた「マツマイは日本ではない」という言葉の抹殺、それが『新羅之記録』に要請されていたことなのである。そして商場知行制や都市松前の整備、キリシタン弾圧に踏み切つた公広の生涯そのものが「マツマイは日本ではない」という己の若き日の言葉の消去であつた。

おわりに

十八世紀の末、当時の松前藩家老であつた松前広長はその著『松前志』においてアイヌに触れて次のように述べた。
 「夫れ毛夷の人となりは情は以て従容として迫らず」と称賛し、アイヌのことを「その貞実和人の及ところに非ず」とまとめている。アイヌに対する蔑視観に満ちていた『新羅之記録』と比べて何という大きな違いだろう。

『新羅之記録』が描き出そうとした歴史像の背景には「蝦夷」の一員である過去から脱却しようという藩の要請があり、それゆえにアイヌとの対立をことさら強調する歴史が表象されることとなった。一方『松前志』の背景にはアイヌに対する非道な扱いを口実に存亡の危機に立たされる藩の内実が見える。この両者の距離を埋める記録が津軽藩に存在する。一六六九年のシャクシャイン戦争の後に津軽藩は藩士と津軽アイヌを蝦夷地に派遣し、内実を調査した。その時おしよる澗（忍路湾―現小樽市内）に潜入した津軽藩士牧只右衛門一行に余市、そつや（宗谷）、るいしん（利尻）の「大将」が愁訴した内容が『津軽一統志』巻十にある。彼らによると、「志摩守（公広）様御代は御慈悲深く、狄俵の米式斗入にて諸事商被仰付候。近年は米七、八升にて前々のことく此方のうりもの御取り替被成、其上万の商おしかい無理非道に計被成、殊に松前え我等事参候事もかく御法度に被仰付候得は皆々狄共餓^{マツ}申候に付、とてもヶ様の被成方にては行さきづき申間敷と何も野心に存、是は蔵人（松前藩家老蠣崎蔵人広林）仕置にてヶ様に罷成申候」ということであつた。ここに主として表されているのは、城下交易体制から商場知行制への転換と、それに伴う鮭―米レートの悪化であるが、同時に松前藩そのものが「蝦夷」からの脱却と「日本」への編入を完成させようともがく姿にも見えるのである。

(付記) 私は家根先生に個人的には親切にしていたが、専攻分野のせいか学問的な接点は少なく、唯一先生に見ていただいたのが一九九四年の立命館史学会大会報告(この報告については「北アジアの変動と室町幕府」『立命館史学』一六号、一九九五年、としてまとめた)であった。この報告前に先生から「題名は面白そうだね」と声をかけていただいたことが記憶に残っている。今回北東アジア史関係で考えていることを先生の霊前に供えようと思った所以である。

注

- ① 新谷行『増補アイヌ民族抵抗史』(三二新書、一九七七年、初版は一九七二年)七四、七五頁。
- ② 澤田洋太郎『沖縄とアイヌ』(新泉社、一九九六年)一二八頁。
- ③ 『アイヌ文化の基礎知識』(草風館、一九九三年、二三頁)。これには事実誤認とアイヌに対する過小評価がある。そもそもアイヌは和人とだけコミュニケーションをとっていたわけではなく、サンタン交易の例を持ち出すまでもなく、多様なコミュニケーションを持っていた。もっとも同書では他に「文字を使つことを迫られるような状況に、いままで置かれたことがない」と述べてはいるので、むしろ前述の記載が蛇足なのであろう。
- ④ 佐々木史郎『北方から来た交易民』(NHKブックス、一九九六年)五六頁。
- ⑤ 羽太の場合は松前藩が小藩で、狡知に長けた商人を押さえられない点に問題を見いだしている。
- ⑥ 岩崎奈緒子『日本近世のアイヌ社会』(吉川弘文館、一九九七年)一七頁。
- ⑦ ここで「和人」とは非アイヌの「日本列島」居住者のことを指す。この概念自体すでに多くの問題が出されており、あまり適当ではない概念であることは自覚しているが、今のところ「和人」に代わる概念も思いつかないのでとりあえず「和人」呼称を使用する。その中であつて佐々木利和氏の「シャモ」概念(『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館、二〇〇一年、二八、三三頁)は検討に値する提言であらう。
- ⑧ 児島恭子「アイヌ史はどこまでできたか」(『歴史評論』六三〇号、二〇〇二年)における「ある幕史による一連の文書に基づいて文意を正確に読み取られ組み立てられた『アイヌ』像は、その幕史のアイヌ像の復元にほかならない」(七一頁)とい

う指摘に倣うならば、『新羅之記録』における「アイヌ」像は、松前景広のアイヌ像の復元である。

- ⑨ 児島前掲論文において、「アイヌの人々は自律的な歴史を奪われ、ひたすら抑圧されてきた民族であるという歴史観を超えることが、研究の潮流であり、現在から未来に生きよとするアイヌの人々の自らの歴史に対する願いであるといえよう」(七一頁)と述べられている。

- ⑩ イサベラ・バード著、高梨健吉訳『日本奥地紀行』(平凡社東洋文庫)二五五頁。

- ⑪ 前掲バード著作、二九〇頁。

- ⑫ 吉本隆明『アフリカの段階について』(春秋社、一九九八年)一三七頁。

- ⑬ 前掲吉本著作一四〇頁。

- ⑭ 羽太正養や最上徳内、松浦武四郎もその一員である。松浦武四郎に対する過剰な思い入れからこのことを無視する傾向が一部著作に見られるのは問題だろう。

- ⑮ バードの記述に典型的に現れているが、基本的には農業や牧畜を行わず、狩猟を行なって生活していることに対する未開視である。にもかかわらずいずれもアイヌの性格については一致して「礼儀正しい」と称賛している。

- ⑯ 十七世紀の西洋人の記録ではアイヌが交易民であることがしばしば強調されている。

- ⑰ H・チースリク編『北方探検記』(吉川弘文館、一九六二年)。以下アンジェリスとカルワリーユの記述はこの本に依拠する。

- ⑱ たとえば網野善彦『日本論の視座』(小学館、一九九〇年、一五頁)。

- ⑲ 海保肇夫『エゾの歴史』(講談社メチエ、一九九六年)二七九頁。

- ⑳ 北構保男編『一六四三年アイヌ社会探訪記』(雄山閣、一九八三年)所収の諸史料。以下関係する史料はすべて同書(以下北構編著作)である。

- ㉑ アンジェリス第二報告書になると「Maqumay」となっている。アンジェリスがこのように表記を変更した理由は不明である。

- ㉒ ワシリー・ミハイロビッチ・ゴロウニン著、徳力真太郎訳『ロシア士官の見た徳川日本』(講談社学術新書、一九八五年)において徳力氏は松前に「マツマエ」とふりがなを振っている(一六九頁)が、なぜこの書だけこのように表記されている

のかは不明である。ちなみにゴロウニン著、井上満訳『日本幽囚記』（岩波文庫、一九四六年）においては「マトマイまたはマツマイ」と表記されており（第三巻九頁）、松前にも「マツマイ」とふりがなを付けている（同二三頁）。同じ個所は徳力訳では「マツマエ」となっている（『ロシア士官の見た徳川日本』一九九頁）ので、あるいは講談社学術新書だけは「マツマエ」と表記する方針だったのかもしれない。

②③ 『蝦夷・千島古文書集成』第一巻（教育出版センター、一九八五年所収）一〇二頁。

②④ 他に「万当宇満伊丈」「前堂宇満伊丈」「別当宇満伊丈」という表記があるが、いちばん古い写本である「権祝本」「梵舜本」とも「萬堂宇満伊丈」と表記している（『梵舜本』では最後の「犬」が「ナ」になっているらしいが）。詳しくは北構保男『古代蝦夷の研究』（雄山閣、一九九一年改訂版一九九三年、四六四～四六八頁）参照。

②⑤ 松前の語源は *matu-oma-i*（和人の女性の住むところ）ということだと考えられており（『増補大日本地名辞書』第八巻（富山房）四十四～四十五頁、『日本地名辞典』（角川書店）参照）、*matu-oma-i* は *mau*（和人の女）*-oma*（居る）*-i*（所）*-ainu*（男子）つまり和人の女性の住む土地の地名を持つ男、という意味らしいが、北構『古代蝦夷の研究』によれば「土地そのものの名に、人名のアイヌのついているのは不自然という見方もあるが、地名と人名との聴取の誤りという程度以上には追及は困難」（四六七頁）ということである。

②⑥ 「マツマイは日本ではない」の部分は原文では「*Matçmai não era Japão*」となっている。「マツマイ」ないで「日本」ということになる。ちなみに「ダイジモナイ」と片仮名表記になっているのは原文でも「*daijimonai*」=「大事もない」となっている部分である。特にアンジェリス第一報告書では宛先が日本滞在経験の長かったアフォンソ・ルセナであったこともあって、日本語をローマ字でそのまま表記したところが多い。

②⑦ 「マツマイの殿は日本人ですけれども、彼らの王であるとも言える」ということは原文では「*O Tono de Matçmai, posto que Japão, se pode dizer que hé seu Rei*」「マツマイのトノ位置—しかも日本、別に言える—しかも彼らの—国王」ということになる。「マツマイのトノは日本に位置すると同時に、彼ら（エン）の国王でもあると言える」というところであるのか。

②⑧ 前掲北構編著作。

②⑨ 『新撰北海道史第五巻』（北海道庁、一九三六年、復刻版、清文堂、一九九〇年）二九八頁。

- ③〇 『松前町史 史料編第一巻』（松前町、一九七四年）五九頁。
- ③① 北構氏は「船頭の弥兵衛、もしくはひょっとすると松前藩士で上乘役の小山五兵衛のいずれかに相当していると思われるが」「後難を恐れて、仮名を使用したのでもあろうか」とのべている（前掲北構編著作、一三〇頁）。
- ③② 海保峯夫編『中世蝦夷史料』三四〇号（三一書房、一九八三年）一二四頁。
- ③③ 『北の海の交易者たち』（同文館、一九九〇年）六十七頁。小林真人「北海道の戦国時代と中世アイヌ民族の社会と文化」（人間田宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内海世界』山川出版社、一九九九年）九十二頁。
- ③④ ここで「アイヌ」と「エゾ」について言及しておきたい。いつまでもなく「アイヌ」と「エゾ」「蝦夷」とは同一のもではない。「蝦夷」に関して言えば、『諏訪大明神縁起絵詞』において「蝦夷」を「渡党」「日ノ本」「唐子」の三つに分類されており、今日「渡党」を和々、日ノ本、唐子をアイヌにつながる人間集団という見方が一般的になされているが、児島正弥氏の教示によるとそもそも「蝦夷」と「エゾ」と読むことすら問題であるという。いずれにせよ「エゾ」なる概念が基本的に他称であることは押さえる必要があるだろう。なお「アイヌ」という呼称はやくイグナシオ・モレーラの「エゾ人の島」（原題 *De Iezorum insula*）の中に「アイノモシヨリ」（*Ainomoxori*）とある（『北方探検記』）。従って蠣崎氏などの館主が「エゾ」出自である、というとは「アイヌ」系であることを意味しているわけではない。これは「蝦夷安東氏」という言い方においても全く同じことである。
- ③⑤ 上村同書において「騙し討ちの多くが、でっちあげ」ではなかったか（六七頁）と書かれており、石井進「中世のかたち」（『日本の中世』1、中央公論新社、二〇〇一年）においても「蠣崎氏当主本人の活躍するパターン化された物語であり、『アイヌ』は常にだまし討ちにあうほどの『愚民』として描き出されている」（一〇三頁）と述べられている。
- ③⑥ 前掲『蝦夷・千島古文書集成』九十八頁、一〇二頁。

（本学文学部非常勤講師）